



# 98.99パーセントの真実

さとし

マウスを握る手は震え、心臓は今にも胸を突き破って飛び出しそうなほど強く脈打っていた。あと数分後に僕の人生は決まってしまっているのだ。一瞬のミスだって許されない……。

汗ばんだ手を拭い、画面を睨めつける。

——カチ……

他の受験生達がマウスを操作する音が静かな試験会場に響き渡り、焦燥感を加速させる。

以前やった過去問題より桁違いで難しい。それとも緊張が問題を難しく感じさせるのか。

あまりの難しさに一瞬思考を放棄したくなってしまうが、縄で思考を捕え手繰り寄せる。

最後の一秒まで諦めるわけにはいかない。

諦めてしまったらここまで努力してきた意味がなくなってしまう。

三歳の頃から毎日六時間の塾通いが始まった。

小学校に上がってからは寝る間も惜しむようにただひたすら勉強だけに打ち込んできた。

友人も作らず、彼女も作らず、楽しく青春を過ごすクラスメート達を横目に見ながらこうして十八年間過ごしてきたんだ。

一一誓ったんだ。

超難関大学に現役合格してあいつらを見返してやる。

そして両親を安心させてやるんだって。

「自分達が学歴で苦労したから子供だけは一流大学に通わせてやりたい」って決して多くはない収入のほとんどを僕の勉強に使ってくれた両親に親孝行するんだ。

頭の出来は決して良くはない僕だけれども、十八年努力してきた結果を今日この日に全てぶつけるんだ。

考えろ、考えろ……入学試験に解けない問題はない。必ず解答が用意されているんだ。考えれば必ず解ける！

「試験終了です。お疲れ様でした」

声が聞こえたと同時にモニター電源が落とされた。

僕の周りに広がっていた試験会場の風景は暗転した。そして非常灯のような薄暗い照明が点灯した。四畳半ほどの薄暗い部屋から手探りで出口を見つけ出し、扉を開ける。

扉の外には新鮮な予備校のバーチャルルームの風景が広がっていた。

僕が入っていたものと同タイプのシミュレーターマシンが数台設置されている。

シミュレーターの入口前には液晶端末を持った先生が険しい表情で立っていた。

「先生」

「ご苦労だったな。さて、早速採点結果が出たので見てもらおう」

先生の持つ端末上に僕が今受けた試験の成績表が表示された。

「どうですか？」

「本番まであと一ヶ月しかないのにお世辞を言っても仕方がないからはっきり言わせてもらおう。合格率は64.62パーセント。今のままでは慶早大学は厳しいな」

僕はうなだれた。

手ごたえはあったと思ったので、正直打ちのめされた気分だ。

「一ヶ月、ひと時も休まず全力で尽くします！ どんなところを重点的に勉強すればいいでしょうか？」

先生は少し呆れたように言った。

「現在のシミュレーション精度の高さは知っているよな？ この受験シミュレーションは過去百年分のデータを元に限りなく本番に近く適正な試験問題を使用している」

「はい、知っています」

「それにお前のこの一年の体調、脳波データなども参考し本番での緊張、コンディションなども全て考慮した上でのシミュレーション結果なんだ。お前も知っているように我が校のシミュレーターでの結果判定は98.9パーセントの精度を誇っている」

「はい」

「お前が人一倍努力していることは先生も知っている。悪いことは言わん、こちらの大学に……」

僕は先生の発言を遮った。

「いえ、お気持ちはありがたいのですが、それでも、僕は慶早大学を受けたいんです。両親と約束した、子供の頃からの夢なんです」

「しかし……このデータを見なさい。今から一ヶ月、もっとも効果的な勉強方法を続けたとしよう。お前の身体データからもっとも効率的な時刻にもっとも効率的な環境で学習したとしても、試験当日の合格率は65.11パーセントまでしか伸びない。努力しているのはお前だけじゃないからな」

「……はい」

「今のお前は慶早大学入試に特化しすぎた勉強を続けてきている。このままでは他の大学も難しいだろう。しかし今から志望校を変更し、それにあわせた試験プランで勉強すれば現役合格だって夢ではないんだぞ。私の計算だと今日の午後四時七分までに志望校を変更すれば93.93パーセントの……」

「いいんです先生」

僕は少し強く言った。

「しょせんシミュレーターはシミュレーションしか出来ません。現実では何があるかはわかりません。どんなに精度が高くても、確率なんかに縛られたくありません。僕は自分の力で未来を切り拓きたいんです」

先生はしばらく僕の顔を睨んでいたが、僕が目を逸らさずしっかりと見つめ返すと、笑顔になつて言った。

「……わかった。もう何も言るのはやめよう。お前のような生徒は久しぶりに見たよ。ここ數十年、確かにシミュレーターの性能は飛躍的に高まった。しかし、確率に縛られて自分の行動まで制限するこ」

「もう結構です、止めてください」

突然画面が消えたのでゴーグルを外すと、妻が白衣の男にゴーグルとヘッドホンを押しつけるように手渡していた。

私は先生の言葉を最後まで聞いていたかったのだが、妻がこう言いだしては仕方がない。

「これ、どうなってるんですか？　どこか壊れてるんじゃなくて？」

妻にゴーグルを押しつけられた男は落とさぬようそれを抱きかかえながら、少し困ったような表情で口を開いた。

「故障ではありません。これがあなた方のお子様の十八年後です。ご主人も奥様もご存じのように今のシミュレーター精度は非常に高く、このような未来になることはまず確実かと思われます」

「信じらない」

妻は怒りながら書類を取り出した。

「それじゃ、これ先生にお願いします」

「わかりました。ご主人もよろしいのですね？」

書類を受け取った男はそれに目を通しながら私に向き直った。

渡されたボールペンのキャップを外し、書類に目を通しながら言った。

「……ええ、墮ろしてください」

ふと、シミュレーションの中で先生が息子に何を言おうとしたのか気になった。

【P'z books】 98.99パーセント

<http://p.booklog.jp/book/51400>

著者：さとし

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sats/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/51400>

ブクログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/51400>

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブクログ